

2009年2月17日 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ダニエル書 7章9節から14節

「私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、火の流れがこの方の前から流れ出ている。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。私は、あの角が語る大きなことばの音がするので、見ていると、そのとき、その獣は殺され、からだはそこなわれて、燃える火に投げ込まれるのを見た。残りの獣は、主権を奪われたが、いのちはその時と季節まで延ばされた。私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

21節から27節

「私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。しかし、それは年を経た方が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にはゆだねられる。しかし、さばきが行なわれ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』」

テサロニケ人への手紙・第二 1章5節

このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

人間はいろいろなことで悩みますし、苦しみます。ですから一番多く発せられる言葉は、「どうして」、「なぜ」という質問です。たとえ信者ではあったとしても、今最後に読んでいただきました箇所は、その信じる者にとっても当てはまるのではないのでしょうか。神様のお答えは、「このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがた信じる者が苦しみを受けているのはこの神の国のためです」と。即ち、この事からは信じる者にとって「必要である」と。

私たちは今日までダニエル書を通して、主は、どのような暗い環境、暗い世にあっても信仰をもって主を証しする人々を探しておられる、ということと一緒に学んできました。しかし主に従って歩み続けてきたダニエルとその友だちは、なぜあれほどまでにも妬まれ、あざけられ、圧迫され、誤解を受けなければならなかったのでしょうか。

ダニエル書1章から6章の間には、非常に激しい戦いが書かれています。この戦いは決してなまやさしい戦いではありませんでした。この戦いには、悪霊や天使の頭（かしら）も加わっていました。こんにちにおいても、同じです。地上における戦いは、天上における戦いでもあります。悪の霊の軍勢は、いつも信じる者を攻撃して狙っています。それとともに、私たちを守る天使もいつも私たちを守っていてくれます。ヘブル書12章1節はたびたび読む箇所ですが、次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

走ることは大切ですが、もっと大切なことは「走り続ける」ことなのです。

新約聖書の手紙は、なぜ書かれたのでしょうか。もちろんイエス様を紹介するためです。しかし目的は、信じる者の成長のために書かれたのです。私たちはなぜ救われたのか、主は何のために用いようと望んでおられるのか、について記されているのです。

エペソ書の中心テーマは、もちろん「イエス様のからだなる教会」です。

エペソ人への手紙 3章10節

これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、

今、それは明後日ではない、再来年でもない、「今」なのです。「教会を通して」（主に属する兄弟姉妹を通して）です。そして、戦いについて6章12節に書かれています。

6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

「血肉に対する」、即ち、人間に対する、目に見える世界に対するものではなく、と書かれています。

私たちも、ダニエルやその友だちのようにこの世と妥協せず主に従おうとすると、彼らと同じように激しい攻撃に会うに違いありません。何倍も熱くした火の炉の苦しみ、また獅子の穴に投げ込まれるというような、死の陰の谷を歩ませられることもあるでしょう。信じる者の多くは、人に言い表わせない、隠れている苦しみや問題があります。なぜこのような問題や苦しみがあるのでしょうか。みことばの答は、今話しました第二テサロニケ1章5節に書かれているように、「神の国にふさわしい者とするため」です。使徒たちは、いつも同じ事実を強調しました。使徒行伝14章22節を見ると、次のように書かれています。

使徒の働き 14章22節

弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならない。」と言った。

他の道がないのです。ダニエル書1章から6章までのあの激しい戦いがなぜ必要だったか、7章を読むと分かります。13節14節をもう一度読みます。

ダニエル書 7章13節、14節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

と書かれています。「見よ、…人の子のような方に主権と光栄と国とを与える」と。ここで言っている「人の子のような方」とは、言うまでもなく主イエス様です。イエス様の御国のご支配は永遠から永遠に続いています。イエス様はマタイ伝の中でよくこの国について話されました。24章30節を読むと、次のように記されています

マタイの福音書 24章30節

そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

これはもちろん空中再臨ではなく、空中再臨の後の「イエス様の公の再臨」を意味しているのです。

マタイの福音書 26章63節、64節

しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答を言いなさい。」イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりに。なお、あなたが

たに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

このようにイエス様が証しなされた結果、「あいつは悪霊につかれている。殺そう」ということになったのです。

ヨハネの黙示録 11章15節後半

「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

もちろん、これは将来に対する予言のことばです。

ではなぜ、私たちの毎日の生活にはそんなに隠された悩みや苦しみがあるのでしょうか。それはイエス様のご支配が全宇宙に現われるためです。主のみこころにかなう者が永遠に残り、みこころにかなわない者は苦しみの炉によって精錬されるためです。今まで私たちが通らせられた悩みや、病の苦しみや、理解できなかった導きの意味が分かるはずです。

ダニエルは言ったのです。

ダニエル書 7章13節、14節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

主が全宇宙を支配なさることが大切であるばかりでなく、私達も主とともに支配する者となるか否かが問題です。私達も主とともに支配するということは、主が私達を召して、そうさせようとしておいでになることです。ですから、このダニエル書7章27節に書かれています。

ダニエル書 7章27節

「国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」

「聖徒」に、信じる者に与えられるとあります。また、

7章22節

「しかし、それは年を経た方が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。」

ここに二度も、聖徒、聖徒たち、という表現が出てきます。将来にもいろいろなことが起こるでしょう。戦いがあり、悩みも苦しみも起こることでしょう。それはみな、私たちが天の御国にふさわしい者となるために起こるのです。つまり、主イエス様とともに支配

するにふさわしい者となるためです。これは、私たちがどんな悩みの中にあっても喜ぶことができる大きな望みです。今後私たちを待っているのはいったい何でしょうか。私たちが待ち望んでいるものは不確かなものではありません。不安と滅びでもありません。主とともに支配する、という素晴らしい「事実」が私たちを待ち受けているのです。

けれど、どのような人々が主からの召しを全うするのでしょうか。また、どのような人々が主とともに支配するようになるのでしょうか。

ダニエル書7章には、人の子イエス様が永遠の主権と権威と国をお持ちになり、ご自身に属する聖徒たちとともに、その御国を支配なさることが書かれています。そして、ダニエル書1章から6章までには、この永遠の御国を主とともに支配するにふさわしい人々はどうのような人々であるかが書かれています。私たちも、主とともに永遠の御国を支配する者になりたいものです。

前回の学びから、ダニエル書1章には「聖さ」について書かれていましたが、もう一度1章8節を読みます。

ダニエル書 1章8節

ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

ダニエルは、汚れたもの、即ち偶像にささげられたものを食べて自分を汚すまいと心に思い定めた、と書いてあります。ダニエルは律法的な命令のためにそのようにしたのではありません。御霊に教えられてそうしたのです。ダニエルは万難を排して、「主に従って行こう」と心に思い定めたのです。私たちの心も、そのように決心しているのでしょうか。私たちは人を恐れず、ひたすら主に従って行こうと心に思い定めたのでしょうか。そのように「全く主に従おう」と思い定めると、御霊は私たちの心の深くに、何が良いか悪いか、何が聖いか聖くないか、また何が妥協であるか妥協でないか、を必ず教えてくださいます。

霊が聖いということは、最も根本的なことです。ですから、主は最初にこのダニエル書1章で、「霊の聖さ」について述べておられます。このダニエル書1章をあまり注意しないで通読しますと、表面的な、またダニエルの全く個人的な問題だと判断されるかもしれませんが、21節を見ると、

ダニエル書 1章21節

ダニエルはクロス王の元年まで仕えてそこにいた。

と書かれています。これは、王は次々と代わりましたが、ダニエルの態度は変わることなく仕え続けたということを表わしています。なぜでしょうか。それはダニエルが聖さを保ち、節制を努め、妥協せず証しをし続けたからです。誤解や迫害や憎しみが数限りなくダニエルを襲いましたが、王は代わってもダニエルは堅く立ち続けました。

多くの信じる者は喜びをもって信仰生活を始めたのに、なぜ途中で、みことばを読む喜びや、祈ることの喜びを失い、霊的に後退してしまうのでしょうか。それは、主に対する心の態度が定まっていなかったからです。「何があっても主に従い、主に仕えていこう」という決意がなかったからです。

「霊の聖さ」を持つことは、誰にも必要です。必要だけではなく、可能です。ダニエルはそれを自分のものとししました。

ダニエル書 1章9節

神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。

もちろん祈りの答として、です。

ダニエル書 1章14節

世話役は彼らのこの申し出を聞き入れて、十日間、彼らのためしてみた。

ダニエル書 1章16節

そこで世話役は、彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることにした。

と書かれています。

ダニエルは、自分は果たしてこの世にあって少しの妥協もなく聖さを保っていけるだろうか、たぶん疑問に思ったことでしょう。

ほかの人々は世と妥協して見せかけだけの祝福に満足しているのに、なぜダニエルだけが妥協せず聖さを保っていくことができたのでしょうか。その当時の世界の支配者に逆らって立つことは、おそらく不可能なことでした。もしそのようなことをすれば、それこそ命に関わることでした。ダニエルは、誰が何と言おうと主に従おうと決意を固めていたのです。ですから、要領よくうまい具合に世を渡るなどということはできなかったのです。このように身も心もささげて、ゆだねきっていたダニエルを主は見放されなかったのです。もちろん守っていてくださったのです。

ダニエルは、異邦の宮殿で主に仕えて、しかも聖さを保っていけることを、身をもって体験しました。あなたが今持っている悩みや苦しみがどのようなものであろうと、今主にすべてをゆだねて「従おう」とダニエルのように決心し、一步を踏み出すなら、驚くべき主の祝福を経験するに違いありません。この世の汚れに染まらずに身を聖く保つには、「主に従順に従う」以外に方法はありません。霊の聖さを持つことは最も大切です。そして、霊の聖さを持つことは誰にも可能です。またその霊の聖さは恵みをもたらします。ダニエルはバビロンに捕らわれていながら、汚れに染まなかったばかりでなく、ほかの人々よりも優れた者と書かれています。

ダニエル書 1章15節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

ダニエル書 1章20節

王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

このことは考えられない奇跡です。「信仰をもって主に従順に従っていく」とき、驚くべき祝福が伴います。主にすべてをささげ世と妥協せず歩む者は、決して悔いることはありません。私たちも、ダニエルのように主に従い、限りない主の恵みにあずかる者になりたいものです。

主のみこころを知ろうと望む者は、節制して「霊の聖さ」を保たれなければなりません。多くの人々は、自分の知っている人々を思い、自分の愛するまた尊敬する人々の心を思つて、「主にすべてをささげる」ことをせず、主のみこころが分からないままです。これが、多くの信じる者にとって主のみこころを知ることのできない原因です。ダニエルは結果がどうであろうとも、「どこまでも主に従っていこう」と決心したのです。

パウロは、コリントにいる兄弟姉妹に、次のように書いたことがあります。

コリント人への手紙・第二 7章1節

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

イザヤは、主に向かって次のように叫ぶざるを得なかったのです。「ああ私はもうだめだ、私は汚れた者です」と。汚れとは、自らの力と聖霊の力とが混じり合っている状態です。

聖さとは、完全に聖霊の支配のもとに入ることです。私たちは、「私は汚れた者です。主よ私から離れてください」と、叫ぶべき状態なのではないでしょうか。私たちは、自らの状態について、主に叫んだことがあるのでしょうか。主もまた、私たちの霊的状态をご覧になり「わざわいなるかな」とおっしゃらないでしょうか。そこまで成長しているのでしょうか。イザヤの証しを読みましょう。

イザヤ書 6章1節から8節

ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ち。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。そこで、私は言った。「ああ、私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただから。」すると、

私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

一行目に「私は…主を見た」とあります。

主とともに永遠の国を支配する人々は、今まで述べてきましたように、

*まず、「霊の聖さ」を持っていなければなりません。

*二番目に、「見分ける力」が必要です。

主の支配なざる世界と、悪魔の支配する世界があります。これは主に属しこれは悪魔に属する、と見分ける力を持つ必要があります。この二つの世界の真ん中に立って妥協するとき、霊的ないのちがなくなり、力がなくなります。残念ながら、多くの信じる者は二つの国を見分ける力がなく、力をなくしてしまっています。一つの実例はペテロかもしれません。マタイ伝 16章23節を見ると次のように書かれています。

マタイの福音書 16章23節

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

「下がれ。サタン。…」、愛するペテロに言われたのです。

もしイエス様が今おいでになったなら、このように言わなければならない信じる者が何と多くいることでしょうか。二つの世界を見分ける力（この区別）は、人間がどのように頭で考えても議論しても、私たちの内に生まれてはきません。これはただ「祈り」のうちのみ、与えられる力です。祈りの人であるダニエルは初めて主の秘密を解くことができたのです。ダニエルの鋭い感覚の源は、この祈りにあったのです。

ダニエル書に戻りまして2章47節を見ると、次のように書かれています。

ダニエル書 2章47節

王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」

王はそれを認めざるを得なかったのです。

主は秘密をあらわされる方です。主はご自身の秘密を、「祈りの人」にだけ教えてください。私たちも、この世の教会と主のからだなる教会を区別する力があるでしょうか。主の教会とは、地につける、つまり、制度から成り立っているものではなく、「イエス様のからだなる教会」とは、全く天に属するものなのです。

私たちは、人の名誉がもてはやされ、人間的な判断が尊ばれる「この世の支配」から全

く救い出されているのでしょうか。

かつてのパウロは、人間に認められたい、尊敬されたい気持ちでいっぱいでしたが、イエス様に出会ってから、彼は全く変わり違う態度をとるようになりました。よく引用するガラテヤ書1章10節は彼の証しです。

ガラテヤ人への手紙 1章10節

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや、神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。

即ち、救われていても、用いられません。私たちはこの二つの世界を見分ける力が必要です。それなくしてイエス様とともに永遠の御国を治めることは不可能です。日々の生活において、主に全く従順に従い、どんなに小さな事においても従っていくなら、この霊的に鋭い感覚が養われてきます。エペソ書5章10節に、一文章だけですが、次のように書かれています。

エペソ人への手紙 5章10節

そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

パウロは、主の恵みによって救われた人々に書きました。

コロサイ人への手紙 1章9節、10節

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

このように、パウロは既に救われた人々のために祈り、戦い続けたのです。

今読みましたように、ダニエル書1章には、「聖さ」の大切さについて書かれています。2章には「見分ける力」の必要性について書いてあります。

* 3章には、「霊的な判別力」を持った人がどのような人であるか書かれています。

その人とは、「真実」な人です。主に「真実」を傾けて十分に従う人に、この素晴らしい「真実」という賜物が与えられます。ダニエルとその友だちは、自分たちが今住んでいるバビロンの国は必ず滅んでしまう。しかし自分たちが仕えている主の国は永遠にとどまる、ということを知っていて確信しました。見分ける力があったからです。ですから彼らは永遠なる主だけを慕い、「真実を尽くして」この主に従ったのです。彼らは二つの国を見分ける力を持っていたので、自由な人々でした、不安、心配から解放された人々でした。

彼らが目指していたのは、永遠に続く主の国だけでした。ですから、どんなことが起ころうと、「真実」を尽くして主に従っていきました。その結果は、いろいろな試みに会うこともありました。ある時は火の炉に投げ入れられ、またある時は獅子の穴に投げ入れられるという激しい試練に会いました。

ダニエルの友だちは、間違いなくダニエルを指導者と仰いでいました。1章では、ダニエルは身を汚さないように、王の食べ物を食べないように、友だちのために話したのです。彼は彼らの代表者のようなものでした。2章では、やはりダニエルが友だちに夢の解き明かしを教えていました。けれど3章を見ると、三人の友だちはダニエル無しに火の炉に入らなければならなかったのです。三人はきっと心細かったに違いありません。ひとりひとりが個人的に、主に「忠実に従っていく」ようになるためには、この試みが必要だったのです。

ダニエル書 3章18節

「しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

三人は激しい試みの中でどうだったでしょう。少しも動揺しませんでした。たとえ火に焼かれようとも、「主に真実を尽くして」従って行ったのです。なぜ三人が、このようにできたのでしょうか。彼らはこの世のものはみなむなしく、神の国のみ永遠に続くことをよく知っていたからです。私たちも滅びるものと永遠に続くものを見分ける力を持っているなら、ただ「上のものだけ」を求めるはずです。ピリピ人への手紙の中に、パウロはこの事実について次のように判断しました。

ピリピ人への手紙 3章12節から14節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して一心に走っているのです。

「罪の赦しを得るためでもなく、主の恵みにあずかるためでもなく、栄冠を得るために、私は一心に走っている。イエス様によって捕えられた者として」。

ダニエルの友だちが通された試みは、考えられないほどの激しい試みでした。3章を見ると、バビロンの総督、長官を始め偉い人々全部、全国民が偶像を拝み、また拝むときにあらゆる楽器を使ったことが分かります。この世のものは一つになって、主なる神に背いていることが分かります。今日においても同じです。総督や長官など偉い人々の意見に従い、それにへつらって賛成するといった人々ばかりです。ただ主のみを仰ぎ見、主のみこ

ころを断固として行なう人は、少ないのではないのでしょうか。

悪魔は、ダニエルの友だちを初めから火の炉に投げ入れようと思っていたのではないでしょう。初めはただ、三人の友だちをこの世に妥協させようと思っていたに過ぎなかったのです。もし彼らがこの世の霊に妥協するなら自分の勝利であることを、悪魔は充分心得ていたからです。火の炉は、三人を霊的に殺してしまおうとする悪魔の最後の試みでした。悪魔は、全イスラエルの民に対してその目的をほとんど達していました。イスラエルの民はほとんど霊的に死んでしまっていたのです。彼らは、ただ形式的に偶像を拝み、それで心を安らわせていたのです。けれどダニエルとその友だちは、あくまで主に忠実に従い、悪魔がどんなに力を持って攻撃しても大丈夫だという、主にある勝利を経験したのです。私たちに対しても、悪魔はこれからいろいろな方法を持って何とかしてこの世の霊に従わせようとして攻撃してくるでしょう。しかしそれに耐えて主に忠実に従っていきたいものです。ペテロもそのような気持ちでいっぱいだったので、当時の信じる者に次のように書きました。

ペテロの手紙・第一 4章12節、13節

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむ事なく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

この箇所を読むと分かりますが、初代教会の兄弟姉妹にとって、激しい試みは決して珍しいものではありませんでした。簡単にこの世のやり方に妥協し、この世の流行を追い、この世の名声を追うキリスト者を、今もイエス様はいぶかる思いを持ってご覧になっています。

妥協して生きると、主のために苦しむことが少なくなります。けれど、主とともに支配する者にとっては、問題です。もう一度、テサロニケ第二の手紙1章5節を読みます。

テサロニケ人への手紙・第二 1章5節

このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

主のご臨在を失い、そればかりでなく、将来私たちに与えられる驚くべき主の栄光を取り逃がすなら、本当に悲劇です。もう一箇所読んで終わります。

歴代誌・第二 16章9節前半

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

私たちはこのような者なのでしょうか。

了